

マーラーの交響曲第9番と「死」をめぐる言説

山本 まり子

1 はじめに

本稿は、グスタフ・マーラー(Mahler, Gustav 1860-1911)の交響曲第9番が、今日まで「死」のイメージを纏って語られ続けてきた現象に着目し、従来の言説を時代と背景、内容に従って整理することにより、作品受容の実態を解明する端緒とすることを目的とする。

交響曲第9番は、主として1909年夏に作曲され、1910年4月1日に完成した。マーラーの生前には出版も演奏もされず、彼の死後 1912年6月26日に、ブルーノ・ワルター(Walter, Bruno 1876-1962)指揮、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団によって初演された。その後、マーラーの妻アルマ(Mahler-Werfel, Alma Maria 1879-1964)、作曲者と直接交流のあったワルターや作曲家ベルク(Berg, Alban 1885-1935)らは、この作品を「死」のイメージを有するものとして積極的に発言した。作曲前後の時代におけるマーラーの仕事環境、作曲傾向、健康状態、家族状況といったいわば状況証拠が、交響曲第9番に死の彩りを添えるのに一役買うことになったのである。以来今日に至るまで、交響曲第9番を説明しようとするテキストには「死」に関する言及がつき纏うことになる。

一方、生前のマーラーは、交響曲第9番に「死」が絡んでいるかどうか直接言及したことはない。死に瀕していたどころか、後述するように、この作品は実際には健康と仕事に対する不安を克服し、精力的に活動していた時期に作曲されている。すなわち、交響曲第9番をめぐる数々の言説は、マーラーの意図がいかなるものであったかという問題とは別に、周辺事情と有力な第三者の発言を通じて醸成されてきたと言っても過言ではないのである。

この研究ノートでは、国内外の言説資料を内容に従って整理する。対象とする言説資料は作曲者と作品に関して広く叙述されたもの、すなわち、書簡・回想録等の一次資料、学術論考・一般書等の二次資料のみならず、CD解説、プログラム・ノート、新聞記事、コンサート予告映像等のジャーナリスティックな文章も含む。それは、本稿が延長上で資料の意味を考察することにより、作品受容の生成と変容という新たな研究視点の提唱を企図しているためである。よって、作品に関心を抱くあらゆる人の目に触れうる文章を広く扱うこととした。

2 作曲の経過

1909年春、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場の指揮者を退任したマーラーは、従来の習慣通り作曲に専念するためにヨーロッパへ舞い戻り、その夏は前年からの新しい

作曲拠点である南チロルのトブラッハ(Toblach; 現イタリア・ドッビアーコ Dobbiaco)に滞在して交響曲第9番を作曲した。8月にはワルターに宛てて、新しい交響曲の作曲に没頭し、「狂ったように大急ぎで書きなぐった」(Blaukopf (ed.): 392)と伝えている。その後楽譜はニューヨークで浄書された。

作曲までの2年間の概略についても記述しておきたい。1907年早々、ウィーンではマーラーの宮廷歌劇場総監督としての運営に対する非難が激化した。水面下で辞任とニューヨーク行きを決めたマーラーであったが、7月12日には長女マリア・アンナが急逝し、数日後には自身も心臓疾患との診断を受けた状態で年末にウィーンを後にし、ニューヨークに向かう。

1908年元旦、ワーグナー(Wagner, Richard 1813-1883)の《トリスタンとイゾルデ *Tristan und Isolde*》を振ってメトロポリタン歌劇場にデビューしたマーラーは、夏には習慣を変えずにヨーロッパへ戻り、作曲に専念する。1907年に着手し、1908年夏に完成した《大地の歌 *Das Lied von der Erde*》は、ハンス・ベートゲによる『中国の笛 *Die chinesische Flöte*』のテキストに作曲された。現世との別離、生への憧憬が歌詞を通じて表現されているが、終曲〈告別 *Abschied*〉の最後の歌詞「永遠に(ewig)」の旋律モチーフは、交響曲第9番冒頭で曲の主要モチーフとして引き継がれており、2曲の間に音楽的連続性を見出すことができる。

3 先行研究

従来の言説の大半は、交響曲第9番を「死」と結びつけているなか、作曲当時のマーラーが死を目の前にした状況になかったと論じ、作品と「死」の関係が、言説の連なりによって生成されてきた物語であると言い切る論考も存在する。

浩瀚なマーラーの伝記的研究書を著したことで知られるド・ラ・グランジュは、交響曲第10番について論を展開しながら第9番について「このときの彼は決して、多くの解説者たちが描きたがるように、重症あるいは瀕死の状態だったわけではない」(ド・ラ・グランジュ 1993: 185)と述べ、マーラーが精力的に活動していた様子を叙述している。

「死」との関連性は有力者たちによる発言によって創り上げられたものであると断じたのはMicznikである。彼女は「マーラーの交響曲第9番における告別ストーリー」と題する論文で、作品が「この世からの告別」と解釈されてきた現象を一つひとつ検証し、それらは音楽自体あるいは歴史的・伝記的事実に即したのではなく、「虚構の物語 (Fictional narrative)」として理解されるべきだと主張している(Micznik 1996: 165)。

前島はアドルノの著書『マーラー 音楽的観相学』(Adorno 1983)を引用しながら強い口調で、マーラーが死の影に脅えていたという“通説”を一貫して否定している(前島 2011; 2012; 2014; 2019)。「一聴しただけでも感じられると思うのだが、何らかの意味で『死』と関わりがある音楽であるのは確かなことだと思う。だが、それを、マーラー本人の『死』や『死への恐怖』と結びつけて考えるのは間違いであることはもっと広く知られて

ほしいものである」と、作品と「死」との関わりを完全否定している(前島 2019: ページ記載なし)。前島が引用するアドルノは、後述するベッカー(Bekker 1921)の言い回しを例に挙げて「くだらないほど誇張された『死が私に語る』と云った表現は、マーラーの交響曲第9番に押し付けられたものであり、これは第3番のなかで花々と動物に対して一旦作者の頭に浮かんだものに比べても、居心地の悪くなるほど、真実を歪曲している」(Adorno 1983: 151)と批判しているのである。

森はコンサートのプログラム・ノートで「1911年の死を起点に死の予感をさかのぼって考えるのは後知恵というものだ」と一旦は認めているものの、「しかし、[中略]テーマが『生との決別』であることは何の疑いもない事実だ」(森 1979: 8)と「死」との関連性を否定してはいない。

村井は「作曲家◎人と作品」シリーズの『マーラー』の中で、「この曲をめぐるのは、こうした話[筆者注: 第九交響曲を書いた作曲家は死ぬので、9番目の作品を《大地の歌》としたが、結局完成した交響曲は9番目までだった]が必ず語られるが、マーラー自身がそうした迷信に言及したことがあるにしても、まじめに取り上げるには値しないと私は考える」と明言している(村井 2004: 269)。

このように、交響曲第9番と「死」の関連性についての言説が事実を歪めていると指摘されてきた一方で、根拠が提示されないまま、「死」と音楽について語られ続けてきたのもまた事実である。以下にこうした言説の実態を確認していきたい。

4 作品を「死」と関連付けた同時代者たち

最初に述べたように、マーラー自身は生前、交響曲第9番を「死」と関連付けるような発言をしていない。作品に「死」の影が忍び寄ったのは、有力な周辺人物たちによる発言に起因する。

1912年、前年にマーラーが亡くなったことを受けて、シェーンベルク(Schönberg, Arnold 1874-1951)はプラハでマーラーの追悼講演を行った。マーラーの妻アルマの回想にあるように、シェーンベルクはマーラー家をしばしば訪れている(例えば、マーラー 2011: 101)。その交流は音楽的議論を伴うもので、その後互いの作曲技法を入念に研究し、影響し合う関係となった。追悼講演では、マーラーは「ほんの2、3の音から空想と芸術性と豊かな変化によって果てしない旋律を作り上げていく」(シェーンベルク 1973: 107)と述べたように、その優れたモチーフ操作を評価しており、音楽に「生」や「死」といった観念を見出すのではなく、あくまでも技法的側面について論じていた(佐野 旭司 2015: 49)。このことから、シェーンベルクが“震源地”とは考えにくいのである。

4.1 マーラーの死から程なく言及された「死」との関連

作曲家ベルクは学生時代から、当時ウィーン宮廷歌劇場監督でもあった作曲家マーラーに心酔していた。師シェーンベルクのプラハ講演と同じ1912年、ベルクは妻ヘレーネに宛

てて毎日のように綴った手紙の中で、マーラーの交響曲第9番について次のように説明している。「この楽章[第1楽章]全体の基調となっているのは死の予感です。それは幾たびとなく姿をあらわします。現世の夢のすべてがここに絶頂を究めています(だから、このうえなく繊細な個所のあとにはかならずあらたな沸騰のように爆発するクレッシェンドがつづくのです)。この爆発がもっとも強烈に起こるところは、いうまでもなく、あの死の予感が確実なものとなり、深い、苦痛に満ちた生の欲望のまっただなかへ《絶大な威力をもって》死がおとずれる恐るべき場面です」(酒田(編) 1980: 116)。前作《大地の歌》から自然と向き合ってきたマーラーが「死の予感」を感じて絶頂を極めているというのである。現代の楽曲解説においても、この叙述が大きな影響を及ぼしたことは確かで、例えば三浦はCD解説書にこの書簡を引用して、第9番を「死の交響曲」と説明している(三浦 1991: 7-8)。

マーラーを「新音楽 (Neue Musik)」の一翼を担うものとして評価した音楽評論家で、その著作に影響力のあったドイツのパウル・ベッカー (Bekker, Paul 1882-1937) は、著書『グスタフ・マーラーの交響曲』の第9番の章で、「第9交響曲には『死が私に語る』こと』という、書かれていないタイトルがある」(Bekker 1921: 340)と述べている。交響曲第3番の作曲過程で各楽章にマーラーが付けていた「○○が△△に語る」という標題をもじったものであり、先述したアドルノの批判の矛先が向いたのはここである。しかもベッカーは本書で、《大地の歌》、交響曲第9番、未完の第10番の三作をあわせて「告别」の章としてまとめ、音楽を作曲者の人生の終末に重ね合わせるように意味付け、読者を誘導している。

このようにマーラーの死後10年で、作曲者の意図とは関わりなく、作品と「死」がリンクする方向へと向かったのである。

4.2 最も身近な人物たちによる「死」への言及

マーラーと深い人間関係のあったワルターと妻のアルマはそれぞれの回想録で、作品と「死」を巡って長年にわたって相当量の言及をしている。指揮者として、妻として、マーラーの最も身近な人物が語った「死」の言葉のインパクトが、その後、作品と「死」を結び付けるのに十分なほど決定的な影響を与えたことは明白である。

そこで、次にこの2人の言葉を見ておきたい。

4.2.1 ブルーノ・ワルター

交響曲第9番の初演を指揮したワルターは、1911年11月20日、前作《大地の歌》の指揮も執っている。この年の5月18日にマーラーは死去しており、ワルターは2つの遺作の初演に当たることとなった。彼はマーラーがハンブルク市立劇場の監督だった時代 (1891-1897) の1894年に当地へ合唱指揮者として着任した。その後1901年、ウィーンのマーラーから招聘され、交響曲第8番の初演に尽力するなどマーラーから信頼されると同時に、多大な音楽的影響を受けることになった。

ワルターの言説は自伝をはじめ数多く残されている。ウィーン国立歌劇場総裁エルヴィン・ケルバー(Kerber, Ervin)に芸術アドバイザー(künstlerischer Berater)として招かれた1936年、『グスタフ・マーラー』と題する著作が出版された(Walter 1936)。これは個人的に深い付き合いのあったマーラーの回想録であり、マーラーの死後25年を経て彼の作品を振り続ける指揮者としての作品解釈でもある。交響曲第9番と「死」をめぐる思索を至る所に見て取ることができる。

彼の解釈は以下のようなものである。作品順では9番目の交響曲と名付けられてもおかしくなかった《大地の歌》を交響曲と名付けなかった点について「かれは、ベートーヴェンや、ブルックナーの『交響曲第九番』が、かれの創作と人生の極点と終局を示していることを考えて、これを潔しとしなかったのである」と述べ、「『交響曲第九番』の管弦楽総譜は、それが交響曲であるために、『第九番』という不吉な名称で呼ばれなければならぬことは、避けられぬ事実であり、「既述したような迷信的恐怖によって、結局かれにも『第九』が存在するようになったという事実を、私に話すのをきらったためであったろう。私は、それまでに、かれの明朗で、強靱な精神に、迷信の兆候をかつてみたことはなかったのだが……。しかし、マーラーの場合もそれが単なる迷信ではなくて、奇蹟の恐ろしい真実性をはっきりと予知する結果となってしまった」(ワルター 1960: 88-90)と、迷信説を言い出している。《大地の歌》との関連性に言及し、純器楽交響曲の第9番の第1楽章に対して「最後の歌曲の表題―「告別」は、「交響曲第九番」の見出しとして用いたのであるかも知れない」と推測し、ついに「終楽章において、かれは平和にこの世に袂別を告げる」と解釈する(ワルター 1960: 175-176)。

ワルターはマーラーから自身に宛てた書簡を引用し、「死の前兆」を読み取ろうとした(ワルター 1960: 210-213)。ワルターによる引用の内容は、マーラー書簡集の側からも確認することができる。1907年夏に心臓病の診断を受けていたマーラーは、《大地の歌》を作曲していた1908年夏から翌年にかけて「死」の言葉を用いて自身の状況を説明している。7月18日は「君は私の身に何が起こったのか、ご存知ないのですから。想像しておられるような死に対するヒポコンデリーのな畏怖などでは、よもやありませんでした。自分が死ななければならないことなど、最初からわかっていることでした」とし(ブラウコップフ(編) 2008: 360)、1909年初めには「今までになく生きることに飢え、『この世に生きているという当たり前のこと』が、かつてなく甘美なものに思われてきます」(ブラウコップフ(編) 2008: 368)と、《大地の歌》のテキストに重ね合わせることのできる発言をした。

ワルターは後年、『主題と変奏 回想と思索』(Walter 1960、邦訳書:『主題と変奏 ブルーノ・ワルター回想録』)でマーラーについて振り返り、「マーラーの『第九』、これもまた去ってゆく者の浄化された感情、死神の影に包まれていた」(ワルター 2011: 253)と作品に「死」の表象を明確に見出している。但しこれは、次に挙げるアルマの回想録が1940年に出版された後の回想であるから、作品と「死」との関係に対して意を強くしての言葉であっただろう。

4.2.2 アルマ・マーラー

アルマは1909年夏の回想で、「からだはいつになく好調で、気分も爽快だった」マーラーが「仕事への情熱をとり戻し、『第九交響曲』を完成した。もっとも自分ではそう呼ばなかったが」(マーラー 2011: 177)と述べ、マーラー自身が数字のジンクスを避けようとしていたと、さらに次のように証言している。

この『大地の歌』に交響曲としての番号をつけることを、彼は避けようとした。ベートーヴェンもブルックナーも十番目にたどりつけなかったことから、第九交響曲という観念にひどくおびえていたのだ。彼は『大地の歌』を最初は九番のつもりで書いたのだが、あとでこの番号を消してしまった。その後九番目の交響曲にかかっていたとき、私にこう言った。「これはほんとうは十番なんだ。『大地の歌』が私の九番だからね。」そして『十番』を書いているときには、「これで危険は去ったわけだ！」と言った。だが彼は『九番』の演奏に生きて立ち合うことができず、『十番』はついに完成にも至らなかった。ベートーヴェンは九番を書いて死に、ブルックナーはついに九番を完成させることができなかつたため、偉大な交響曲作曲家は九番以上は書けないという一種の迷信が生まれたのだった。(マーラー 2011: 135)

ただ、一般にアルマの回想録に対する信頼度は、結婚前の恋人ナターリエ・パウアー＝レヒナー (Bauer-Lechner, Natalie 1858-1921) による回想録 (Killian (ed.) 1984) と比較して低いと評価される。それは、回想録の書かれたのが夫亡きあと、自由奔放な恋愛経験を積み重ねて30年経過した時点での美化された「思い出」の側面を否定できないからであり、しかも自己プロデュースに長けていた独特な感性が生み出す文体に由来するからである。村井の見解を借りれば、「晩年のマーラーを悲劇の主人公にしようとする彼女流の神話づくりの一環」であった (村井 2004: 269)。以下に挙げるマーラーの状況についてもそれを念頭に置いて読み進めたい。

5 作曲に至るまでのマーラーの環境と健康状況

では、一心不乱に第9番に向かっていた1909年夏、マーラーの仕事環境と健康状態はどうだったのか。マーラーは実のところ不安を克服し、活動意欲も旺盛であったようである。

1907年は前述したように、マーラーは歌劇場での多種多様な軋轢からヨーロッパ楽壇トップの地位を離れ、年末には新天地ニューヨークへと本拠地を移することになる。その心労は想像に難くない。この年、7月12日に長女マリア・アンナが猩紅熱で急死し、アルマの体調を心配したマーラーが自身も医師の診察を受けると、そこで心臓病と診断される。ウィーンの大学病院で改めて診察を受け、「代償作用で補正されてはいるが、先天性の両弁膜疾患」と宣告され、「登山も、自転車も、水泳も禁じられた」らしい (マーラー 2011: 143)。

翌1908年もトブラッハでの日々を、彼が心臓に爆弾を抱えている様子をアルマは描写している。

彼は散歩のあいだもたえず立ちどまっては、脈の数をかぞえた。またしばしば、心音が澄んでいるか、たかぶっているか、穏やかか、胸に耳を当てて聴いてくれと、昼間のうちから私にたのむこともあった。私は何年もまえに、二拍目が異常に強く響くあの耳ざわりな鼓動に気づいてぎょっとした。それ以来、彼の心臓には異常があるのかもしれないという漠然とした不安におびえてきたのだった。[中略] マーラーは歩程記録計をポケットに入れ、歩数と脈拍の数をかぞえながら歩く。生きていることが彼には拷問になったのだ。(マーラー 2011: 166)

ただし、ド・ラ・グランジュは異なるニュアンスで、次のように1908年のマーラーを表現している。「幸い、一九〇八年の夏、トブラッハにはじめて長期滞在したことで、重要な転機が訪れた。マーラーは徐々に不安を克服していった。彼は、田舎で健康的な生活を送りながら、激しい運動を避けて、心臓病を手なずけることを覚え、病気についてほとんど意識しなくなるまでに回復したのである」(ド・ラ・グランジュ 1993: 183-184)。

さらに、「つぎのシーズン—ニューヨークのメトロポリタン歌劇場での二度目のシーズン[1908-1909年のシーズン]—には、マーラーの健康状態はずっとよくなっていった。彼は、ふたたび人生を楽しみはじめ、芸術家やニューヨークの富豪の邸宅での社交的な集まりにも顔を出した」(ド・ラ・グランジュ 1993: 185)。そして、先行研究の項でも引用したように、1909年の夏を重症でも瀕死の状態でもなかったと断言する。

アルマもまた、夫が交響曲第9番の作曲に没頭して1909年の夏について、「マーラーは仕事への情熱をとり戻し、『第九交響曲』を完成した」ことを報告し、「彼自身も感じていたように、からだはいつになく好調で、気分も爽快だった」と述べている(マーラー 2011: 177)。舞台美術家アルフレート・ローラー(Roller, Alfred 1864-1935)に宛てた書簡(ブラウコップ(編) 2008: 387)でマーラーは、「私流に『至福』」だったので、彼を招待するとともに、実業家フリッツ・レートリヒ(Redlich, Fritz 1868-1921)夫妻とリヒャルト・シュトラウス(Strauss, Richard 1864-1949)夫妻が来訪することを報告している。R. シュトラウスもまた自分の訪問についてマーラーに宛てて予告している(ブラウコップ(編) 1982: 185)。1909年の夏はすなわち、新作の作曲に邁進しながら、「至福」の夏を多くの訪問客とともに過ごした夏だったのである。

1909年秋からのシーズンのマーラーの活動状況を、ド・ラ・グランジュはニューヨーク・フィルとの演奏会の回数データで示している。それを踏まえ、筆者が改めてニューヨーク・フィルのデジタル・アーカイブ(<https://archives.nyphil.org/>)で調べたところ、マーラーが1909/1910シーズンに振ったのは1909年11月4日から1910年4月2日で、37プログラム47公演であった。約5か月間、ほぼ3日に一度のペースでコンサートの本番をこなしている。

練習やリハーサルを含めれば、ほぼ毎日のように指揮活動を行っていたはずであり、まことに精力的である。

6 楽譜に書かれたとされる「死」の表象

作曲経過から明確なのが、《大地の歌》の終曲〈告別〉の最後に置かれた「永遠に (ewig)」の歌詞に充てられたモチーフと、交響曲第9番冒頭で提示される主要モチーフとの連続性である。《大地の歌》で見られた生と死のせめぎ合いを第9番で再度示すことで、テキストを伴わない純器楽曲の第9番でも同じ問題が扱われることをマーラーは示唆したと、通常は解釈される。

また、楽譜上で死の象徴としてしばしば取り上げられるのが、最終小節の「息絶えるように (ersterbend)」の文字表示である。楽曲のムードを象徴するとされがちなこの表示は、しかしながら、第9番以外の交響曲にも次のような形で使用されている。

- a) 第2番：第4楽章〈原光 *Urlicht*〉の結びに *gänzlich ersterbend* (「完全に息絶えるように」の意)。なお、単独歌曲としての《原光》のオーケストラ版でも同様
- b) 第4番：第3楽章の結尾に *gänzlich ersterbend*。第1ヴァイオリンには *morendo* の表示
- c) 第7番：第4楽章で、第1クラリネットに *ersterbend* と *morendo* のセットで使用。
バス・クラリネットとハープにも *ersterbend* の表示
- d) 《大地の歌》：オーケストラ版では終曲の結尾に *gänzlich ersterbend*、ピアノ版にはなし

マーラーが第9番に「死」を意識して指示したとされる *ersterbend* であるが、実際には1893年8月に書かれた〈原光〉から使われており、*ersterbend* が第9番と一対一で対応していると考えるのは明らかに誤りである。

さらに注目されるのは、第3楽章の半ばから支配的になるターンの音型である。これは、1883年(あるいは1884年とされる)に作曲された《さすらう若人の歌 *Lieder eines fahrenden Gesellen*》の冒頭から、恋人との別離を表現して以来、時折姿を見せてきた。第4楽章終盤に引用される《亡き子をしのぶ歌 *Kindertotenlieder*》の旋律もまた、緩やかなターンの音型で表される。

こうして、第9番の楽譜上に「死」の表象として書き込まれたとされる文字や音型は、比較的初期の段階から音楽に織り込まれてきた。「死」「告別」は第9番だけのテーマではなく、世紀末芸術における時代精神の表明でもあったのである。

7 解釈、解説される「死」と音楽

7.1 数字のジnkス

4.2.1と4.2.2で引用したように、マーラーが、交響曲に9と番号付けするのが不吉だと考え、《大地の歌》にその数字を充てなかったが、結局次作に付けることとなったとす

るジnkスの出所は、明らかにアルマ(2011: 135)とワルター(1960: 88-90)である。当
のマーラーは、1910年4月1日にワルター宛の書簡で「僕の9番(IX)の浄書が出来上がった」
と数字の使用を避けることなく報告している(Braukopf (ed.) 1996: 407)。

ヴェスリングは、マーラーが数字にこだわりを持っていて「数の組み合わせが『運命の
原初的で、神秘的なかかわり』があると信じて」おり、13日と26日を避け、「フレンケル
博士と『生死にかかわる数の問題』について議論した」と述べている(ヴェスリング 1989:
279-280)。これが事実であるなら、確かにマーラーにとって数字がある種の意味を持って
いたことになる。もっとも9を避けていたことの証拠とはならないが。筆者はこの二次的
情報の出所を調査しているが、本稿執筆の時点で見つけるには至っていない。

数字のジnkスについては、以下のような解説がなされてきた。いずれも一般向けの曲目
解説の趣旨で書かれているため、出典は記載されていない。

これに先だつ〈大地の歌〉は [中略] 彼の第9番となるはずであったが、彼は、この
数字を避けた。それは、独訳された漢詩にもとづく6楽章という独自の構想による
ものだったかもしれないが、もっと心理的なものであった。(藤田 1986b: 7)

もともと迷信的な気質だったマーラーは、《大地の歌》を「声楽つきの交響曲」と題
することによって、9という不吉な数を追い払おうとした。(シェルリース 1986:
ページ記載なし)

元来彼は、ベートーヴェン、シューベルト、ブルックナーなどがそれぞれ第9交響
曲を書き上げて世を去ったということに迷信的な恐れを抱き [後略] (渡辺 1990: 2)

《第9》にまつわる宿命的な先輩作曲家の生涯を考慮して第9番と呼ぶのを避けた
ほどだった。それほどだったので、今度の第9交響曲にはマーラーの死への直視の
姿がある。(門馬 1991: 44; 門馬 1996: 7)

第9番が最後の交響曲となってしまった大作曲家のジnkスを恐れた彼は、実際の
9番目の交響曲に《大地の歌》というタイトルをつけ、そのジnkスを避けようと
した。(榊 1992: 2)

マーラーはベートーヴェンがそうであったように、いかなる作曲家も「第9交響曲」
を書いて生き延びることはできないという迷信から、『大地の歌』に番号を付けず
おいた。(ジルバーマン 1993: 223)

ナンバー付きの9つの交響曲を書くと、作曲家の生涯が終わるという迷信にも、惑わされた。[中略] 結局この曲に「9」と付けたのはマーラーが自分の死を直視したからだ、という見方もできなくはない。(堀江 1996: 7)

[[《大地の歌》は] 9番目の交響曲(オーケストラ歌曲)だが、交響曲第9番と書くと死ぬ、つまり最後の交響曲になるという先人たちのジンクスを避け、交響曲とは銘打ったものの、あえて通し番号を付けなかった。もちろん連作歌曲としての性格を考慮して、ということも考えられる。(奥田 2012: 5)

マーラーは、ベートーヴェン、シューベルト、そしてブルックナーがそうであったように、自身の《第9番》を書いた作曲家はもはやそれ以後に生きることができないと信じていた。そこでマーラーは、順番からすれば9番目の交響曲にあたる《大地の歌》に番号を付けないままにして、次なる交響曲を書き上げることにした。[中略] 結局、マーラーは自分の迷信を自分でなぞることになる。(藤田 茂 2012)

7.2 死の予感、死との対峙

ジルバーマンは『グスタフ・マーラー事典』の一項目として「死の予感／死の思索 Todesahnung / Todesgedanke」を置いている。これは第9番に関して過去に語られた「死の予感」について解説するものではなく、また各楽曲の死のモチーフを分析的に紹介するものでもない。マーラーが音楽で告知しようとしたのは、「彼にとっては生存が同時に存在と生成の双方であり、滅びであると同時に新たな生成であるような人間」(ジルバーマン 1993: 277)とし、彼の音楽美学のありようを咀嚼して提示している。シルバーマンによれば、「生のただなかにおける死の現前」こそがマーラーの創作の内容であるという(ジルバーマン 1993: 278)。

この類の思索的言説は別として、「死」に言及する一般向けの解説では、作品と「死」の関連性について「…と言われる」「…と感ぜられる」と、曖昧にぼかすような伝聞調や推測で記述されることが多い。

この完成された彼の最後の交響曲は、あきらかに、彼の死への予感を物語るものでもある。(藤田 由之 1986a: 7-8; ほぼ同文 藤田 由之 1986b: 7-8)

この作品は晩年病身であったマーラーが、死の予感に襲われつつ書き上げたのであるといわれる。(渡辺 1990: 2)

内容的には、前作「大地の歌」と密接に通じ合うものがあり、死の予感とすべてを超越した諦念を感ずることができる。[中略] この交響曲に死の影が現れていることは明らかである。(大崎 1992: 2-3)

[前略]「交響曲第9番」を作曲したのは、この曲に対する非常な創作意欲が湧きおこったためであり、既に迫りくる死を予感していたためとも考えられる。当時マーラーは体力が衰弱し、いやでも死と対峙する心境であった。(小石 1993: ページ記載なし)

娘の死と自分の体調の不調から、この曲の作曲のころには、死ということをしばしば考えた。(門馬 1996: 7)

「[前略] 多忙で充実した活動に没頭していったが、その一方、彼の精神の中には疲れと、健康への不安感と、死への予感がしのび寄っていた」(東条 2001: 4)。

「死への予感にあふれた交響曲であることは明白であろう」(諸石 2009: 3)。

「ゆっくりとはじまり、ゆっくりと静かに沈黙に消えていく交響曲は、いくらかの諦念を含んだ穏やかさと死の予感に満ちている」(白石 2012: 4)。

7.3 「死」のキーワードで作品全体を説明

「死」が作品の統一テーマであると解釈し、ほぼ全編を「死」というキーワードで説明しようとする言説も見られる。以下にそのような例を引用しよう。

(1) シェルリース (1986: ページ記載なし)

天上のパラダイスの心に迫るヴィジョンが、第9交響曲の末尾にも漂っている。先行するすべてのもの—深淵の瞬間や、滅び、死との闘い、葬列の、あるときは幽霊のように不気味で、あるときはたくましい形象、最初の一音からこの交響曲を内的なテーマのごとくに貫いている息づきを求めての闘い、開花と凋落、挫折と分裂が、ここから、新しい究極的な意味を獲得する。その意味とは、慰めと救済である。

(2) 萩原 (1992)

この交響曲第9番にいたって、死はもはや決定的であり、絶望は覆いかくすすべがないとしても、そうした恐怖や絶望の淵から、マーラーの消し難い「生への信念」もまた披瀝されるのである。

マーラーはここで、みずからの生命力を実証し生命の讃美を確信するいっぽう、その内的な葛藤を最も苦痛にみちた表現主義的ロマンティシズムのなかでの緊張にたかめてみせたのである。

この世でのあきらめと彼岸での解決を求めようと努力しながら、感動的な終焉へと進む。生への訣別はつねに清澄な気分のなかにあり、はてしれぬ永遠の沈黙へと「死ぬように」ersterbend……消えていく。

(3) 柴田 (2004)

マーラーにとっての「死」というテーマを除外してこの交響曲第9番を考えることは、とても不可能であるといつてよいだろう。

この交響曲第9番は、死と隣り合わせに生きた当時のマーラーの精神の営みが鮮やかに音に結晶することになった異色の作品なのである。

マーラーの死との痛々しい格闘が描かれているといえるこの楽章[第1楽章]は、死と密着していた当時のマーラーの魂を恐ろしいほどリアルに浮き彫りにするまでにも至っている。

振幅の大きな音の流れから生成されるこのフィナーレでは、死後の世界で訪れる幸福や平和への痛ましい期待が聴き手の胸をえぐるに違いない。

(4) 白石 (2012)

第9番の交響曲をつぶさにみていくと、これまでの作品よりはるかに「死」が大きな影を落としていることがわかってくる。いまの一般的な同世代では考えられないほど「死」への洞察は徹底していて、しかも自らの死線の向こうにある新時代を予言する力までもっていた。

ここでは生をまっとうした者のみが迎える穏やかな死が描かれ、あたかも現世の苦悩が浄化されるかのようだ。

(5) 佐野 光司 (2017)

《第9番》の内容については多くの研究者が「告別と死の予感」について語っている。ベルクは実際にこの作品をピアノで弾いた感想を「死の予感に基づいている」と述べ、シェーンベルクは初演(1912)の後「《第9番》は1つの限界であるかに思えます。ここを越えようとすれば、死を覚悟しなければならぬでしょう。」と語ってる。

実際この曲には諦念の感が色濃く漂っている。しかも終楽章の最後に消え入るように終わるところには「死に絶えるように」と書き込んである。1907年に発覚したマーラーの心臓疾患もあり、彼の胸中に死への予感が宿っていたことは否めない。

(6) 野本 (2019)

精神分析的にあって、もともとマーラーに「死への期待」「破滅願望」があったことは事実であろう。それは第6番『悲劇的』の英雄を倒すハンマーなどにも見てとれる。しかし、愛娘の急死と自身の心臓病は、「死」をもっと身に迫った問題として突きつけたと思われる。

第9番完成後、妻アルマ(1879-1964)と建築家グロピウス(1883-1969、のちのバウハウスの創立者)との不倫が発覚。アルマとの関係が急速に悪化すると、マーラーはうつ状態となり、精神分析医フロイトの診察を受けた(今日風にいうと、精神カウンセリング)。

ストレスが心臓に良いわけがない。心臓の治療も受けたが、1911年5月18日、ウィーンでマーラーは帰らぬ人となった。

野本は同じ解説の中で、バーンスタイン(Bernstein, Leonard 1918-1990)が第1楽章の冒頭に提示される不規則なリズムをマーラーの「不整脈」と呼んだことに触れている。これは、ウィーン・フィルとのマーラー全曲録音の際のリハーサルを収録した映像(Bernstein on Mahler 9 (1/6))の中で、バーンスタイン自身がナレーションで「この2音によるリズムはマーラーの心臓の鼓動の乱れであり、“さようなら”を表していると語ったことに由来する。

なおバーンスタインは、この一連のリハーサルの中で、第4楽章冒頭を「苦しい時、死の時にともにご一緒にいてください」と神に祈る歌詞内容の“Abide with me”(讃美歌「日暮れて四方の暗く」)の引用であるとも語っている(Bernstein on Mahler 9 (5/6))。

(7) その他

新井は、NHK交響楽団のホームページ企画「ワン・フレーズ・クラシック」でマーラーの交響曲第9番を取り上げ、『死』は、彼の全作品を貫く物語のモチーフ」という視座からアプローチし、第9番に対する「死」からの解釈が妥当かどうか、コメントしている(新井 初出不明)。

朝日新聞のコンサート関連記事でも、第9番に「死」のキャッチコピーが導入されている。2018年5月に沼尻竜典が神奈川フィルを振るのに際して行われた、指揮者自身の解説講座の記事の冒頭の表現は、「マーラーが自身の死を予告するかのように残した交響曲第9番。」(朝日新聞 Digital 2018)となっている。

松浦は「二長調の死の世界」、「断末魔の叫び」、「目もそむけなくなる惨劇を早回しで見せつけられるようなおぞましい終末」等、言葉の綾を尽くして、作品が幸福な生からの離脱を示していることを語ろうとしている(松浦 2019)。

本稿での調査の時点より後にも、おそらく類似した表現は世に送り出されていることが容易に推測される。この種のテキストを拾い上げれば枚挙に暇がなくなるであろう。

8 海外の曲目解説における内容の動向

CD解説、プログラム・ノートについては、ここまで主として国内の例を挙げてきた。海外のコンサートにおける第9番のプログラム・ノートの類では、「死」を巡ってどの程度語られているのかを見てみたい。現在、新型コロナウイルス感染拡大の影響で大規模なオーケストラ編成を要するマーラーの作品は回避される傾向にあり、実演の機会に乏しいのが現状であるが、数年前の例をいくつか挙げてみよう。

2014年にBBCのプロムスで演奏された際のプログラム・ノートは、楽譜と伝記的事実に即した偏りのない記述となっている。作品に「死」の影が漂うといった表現は見られない(Hayes 2014)。

2018年5月9日に開かれたシカゴ交響楽団のコンサートのためのプログラム・ノートでは、冒頭のリズムが不整脈の鼓動に聞こえること、数字のジグクス、「死」を打ち出したベルクの書簡の引用が綴られ、作品と「死」を結ぶ国内の曲目解説と同様の傾向がみられる(Huscher 2018)。

2018年10月21日に開かれたベルリン・ドイツ交響楽団の演奏会に向けて、指揮を執ったケント・ナガノ(Kent Nagano)が出演するトレーラー動画には、詳細な曲目説明が書かれている(Deutsches Symphonie-Orchester Berlin 2018)。説明文には数字のジグクスや「告别と死」のエピソードが取り上げられてるが、動画でナガノが発言しているのは、アメリカに移ったマーラーが新世界、新世紀に行った音楽的革新を、現代に置き換えて聴いてもらいたいということである。

9 むすび

マーラー自身による直接的な言及がない中、純器楽曲である交響曲第9番を「死」と関連付けるべく、彼の周辺人物と後世の人々は音楽それ自体と当時の環境の中に「死」に近づくことのできる状況証拠と「死」の表象を見出そうとしてきた。

マーラーにあって、「死」は第9番だけのテーマではない。彼の音楽の底流に初期から「死」およびそれと紙一重のところにある「生」があるのは周知の事実である。「生」と「死」は世紀末芸術の時代精神でもあった。確かに家族や仕事上の環境、健康問題が音楽に「死」を引き寄せる要因であることを否定することはできないであろう。しかし、作曲当時のマーラーは死が迫りきて生の崖っぷちに追い込まれた悲痛な作曲家ではなかった。日常的にはむしろ「死」に脅かされることは少なく、精神的な安定の中で創作に没頭できる状態にあった。作品を彼の悲劇的な心象風景の投影とだけ評価するのには無理がある。むしろ「生」に満たされていたからこそ、全作に通底する諦念を表出することが可能だったと考えたほうが自然であろう。

今回第9番に関する様々な言説を整理してきたが、これらの資料価値もまた多様である。アルマやワルターというごく身近な存在の発言も、マーラーの存命中に記録されたものではなく、ストーリーとしてうまく辻褄が合うように脚色された部分もあるだろう。歴史的、

客観的事実を見極めながら、各種資料を突き合わせて実証的に検証していくことは、今後のマーラー研究において重要な姿勢であると考えられる。

その際、マーラーがどのような意図をもって作曲したか、その源泉を辿ることはマーラー研究のアプローチ法の一つではあるが、第9番に見られるように、作曲家の思いとは別に、現在に至るまでのあらゆる言説の集積がマーラー受容を形成し続けたことには、留意する必要があるだろう。

*本稿における外国語文献の引用の際、筆者が原著を翻訳した場合は出典に原著情報を記載し、翻訳書を使用した場合は邦訳情報を記載した。また、引用部分で筆者による補足は[]で示した。

参考／引用文献

Adorno, Theodor W. アドルノ, テオドール W.

1986 *Mahler. Eine musikalische Physiognomik*. In Adorno: *Gesammelte Schriften Theodor W. Adorno Band 13: Die musikalischen Monographien* (suhrkamp taschenbuch wissenschaft 640). Frankfurt am Main: Suhrkamp: 149-319 (1^a 1960).

1999 日本語訳『マーラー 音楽的観相学』龍村 あや子 (訳) 東京: 法政大学出版局.
新井 鷗子

初出不明 「ワン・フレーズ・クラシック: 第19回 マーラー《交響曲 第9番 ニ長調》
<https://www.nhkso.or.jp/library/onephrase/32/> 2019年8月16日閲覧

朝日新聞 DIGITAL

2018年4月29日 「<お知らせ>沼尻竜典が語るマーラー交響曲第9番」
<https://www.asahi.com/articles/DA3S13473361.html> 2021年10月29日閲覧

Bekker, Paul

1921 *Gustav Mahlers Sinfonien*. Berlin: Schuster & Loeffler.

Blaukopf, Herta (ed.) ブラウコップフ (ブラウコップ), ヘルタ (編)

1996 *Gustav Mahler Briefe*. Wien: Paul Zsolnay Verlag.

2008 日本語訳『マーラー書簡集』須永恒雄 (訳) 東京: 法政大学出版局.

1988 2nd. *Gustav Mahler Richard Strauss Briefwechsel 1988-1911*. München: R. Piper & Co. Verlag (1^a 1980).

1982 日本語訳『マーラーとシュトラウス ある世紀末の対話—往復書簡集 1888～1911』塚越 敏 (訳) 東京: 音楽之友社.

de La Grande, Henri-Luis ド・ラ・グランジュ, アンリ＝ルイ

1993 日本語訳『グスタフ・マーラー 失われた無限を求めて』船山 隆; 井上 きつき (訳) 東京: 草思社.

Deutsches Symphonie-Orchester Berlin

2018年10月21日公開. Kent Nagano dirigiert Mahlers Neunte Symphonie.

<https://youtu.be/s-RjDb6SjC4> 2021年10月29日閲覧.

藤田 茂

2012 「マーラー 交響曲第9番ニ長調」『フィルハーモニー』74(7): ページ不詳.

藤田 由之

1986a 「(タイトルなし)」『マーラー 交響曲第9番 ニ長調 (K. ザンデルリンク／ベルリン響)』CD解説書. 東京: 徳間ジャパン(ドイツ・シャルプラッテン). 32TC-108-109: 1-6.

1986b 「交響曲第9番ニ長調」『マーラー: 交響曲第9番、10番「アダージョ」(マゼール／ウィーン・フィル)』CD解説書. 東京: CBSソニー. 54DC671-2: 6-11.

Gibbs, Christopher H.

2019 “The music. Symphony No. 9”

<https://www.philorch.org/globalassets/philadelphia-orchestra/on-demand/program-notes/mahler-symphony-no.-9.pdf> 2021年10月29日閲覧.

萩原 秋彦

1992 「楽曲解説」『マーラー 交響曲 第9番 (バーンスタイン／ベルリン・フィル)』CD解説書. 東京: グラモフォン. POCG-1509/10: 9-12.

Hayes, Malcolm

2014 “Programme note: Mahler - Symphony No. 9” Proms 2014.

<https://www.bbc.co.uk/proms/whats-on/2014/analysis/183> 2021年10月29日閲覧.

Hein, Hartmut

2010 “Mahler-Interpretation(en): Zur Aufführungsgeschichte und Diskologie”, *in*: Sponheuer; Steinbeck 2010: 453-47.

堀江 昭朗

1996 「(タイトルなし)」『マーラー交響曲第9番 (ノイマン／ゲヴァントハウス管)』CD解説書. 東京: 徳間ジャパン(ドイツ・シャルプラッテン). TKCC-15042: 3-8.

Huscher, Phillip

2018 “Program Notes, Gustav Mahler Symphony No.9” Chicago Symphony Orchestra.

<https://csosoundsandstories.org/salonen-conducts-mahler-9-may-2018-cso/> 2019年8月16日閲覧.

Killian, Herbert バウアー＝レヒナー, ナターリエ (著); キリアーン, ヘルベルト (編)

1984 *Gustav Mahler: In den Erinnerungen von Natalie Bauer-Lechner*. Hamburg: Karl Dieter Wagner.

1988 日本語訳『グスタフ・マーラーの思い出』高野 茂 (訳) 東京: 音楽之友社.

小林 宗生

- 2002 「交響曲第9番ニ長調」『マーラー：交響曲 第9番 (アバド／ベルリン・フィル)』
CD解説書. 東京: ユニヴァーサル・ミュージック (ドイチェ・グラモフォン).
UCCG-1106: 2-4.

小石 忠男

- 1993 「曲目について」『マーラー 交響曲第9番 ニ長調 (小澤征爾／ボストン響)
CD解説書. 東京: フィリップス. PHCP-1610-1: ページ記載なし.

前島 良雄

- 2011 『マーラー 輝かしい日々と断ち切られた未来』 東京: アルファベータ.
2012 「シリーズ 名曲の深層を探る 第1回 マーラー 《交響曲第9番》このうえもない
幸福の日々のなかで書かれた音楽」『フィルハーモニー』84(7): ページ不詳.
2014 『マーラーを識る 神話・伝説・俗説の呪縛を解く』 東京: アルファベータブックス.
2019 「楽曲解説」『マーラー 交響曲第9番ニ長調 (ブロムシュテット／バンベルク響)
CD解説書. 東京: キングインターナショナル(Actus). ACC-30477CD: ページ記載なし.

Mahler, Alma マーラー (=ヴェルフエル), アルマ

- 1991 *Gustav Mahler: Erinnerungen*. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag (1st *Gustav Mahler: Erinnerungen und Briefe*. 1940, Amsterdam: Allert de Lange).
2011 日本語訳『マーラーの思い出《新装版》』酒田 健一(訳) 東京: 白水社 (1949年の
原著第2版, 1969年のミッチェルによる英訳版, 1971年のミッチェルによるドイ
ツ語新版に基づく).

松浦 一生

- 2019 「作品解説」『ゼンパーオーバー・ライヴ集成 第3集 (シノーポリ／シュターツ
カペレ・ドレスデン)』CD解説書. 東京: キングインターナショナル(Altus).
PALT-004/5. 7-9.

Micznik, Vera

- 1996 “The farewell story of Mahler's ninth symphony.” *19th century music*: 20: 144-166.

三浦 淳史

- 1991 「マーラー：交響曲 第9番 ニ長調」『マーラー 交響曲 第9番 (バルビローリ
／ベルリン・フィル)』CD解説書. 東京: 東芝 EMI. TOCE-7208: 5-8.

門馬 直美

- 1991 「交響曲 第9番ニ長調」『マーラー 交響曲集 (クレンペラー／フィルハーモニア&
ニューフィルハーモニア・オーケストラ)』CD解説書. 東京: 東芝 EMI. TOCE-7376
～7382: 43-46.
1998 「曲目解説」『マーラー:交響曲第9番ニ長調(ラトル／ウィーン・フィル)』CD解説書.
東京: 東芝 EMI. TOCE-9701: 6-11.

森 泰彦

1979 「プログラム・ノート」『マーラー：交響曲第9番（インバル／日本フィル）』
CD解説書（演奏会プログラム転載）. 東京: DENON. COCO-80116-17: 8-10.

諸石 幸生

2009 「曲目解説」『マーラー：交響曲第9番（大植英次／北ドイツ放送フィル）』
CD解説書. 東京: オクタヴィアレコード. OVCL00396: 2-4.

村井 翔

2004 『作曲家◎人と作品 マーラー』 東京: 音楽之友社.

New York Philharmonic

Digital Archives. <https://archives.nyphil.org/> 2021年10月29日閲覧.

野本 由紀夫

2019 「楽曲紹介」東京フィルハーモニー交響楽団 プログラム
<https://www.tpo.or.jp/concert/pdf/201902program.pdf> 2021年10月29日閲覧.

奥田 佳道

2012 「楽曲解説」『マーラー 交響曲 第9番 ニ長調（秋山和慶／九響）』CD解説書（初出：
九州交響楽団第313回定期演奏会プログラム）. 東京: フォンテック. FOCD-6021/2:
3-7.

大崎 滋生

1992 「楽曲解説」『マーラー 交響曲第9番ニ長調（ワルター／コロンビア響）』
CD解説書. 東京: ソニーミュージック. SRCR 8798-9: 2-7.

榊 洋希

1992 「交響曲 第9番 ニ長調（マーラー）」『マーラー 交響曲 第9番（ショルティ
／シカゴ響）』CD解説書. 東京: ポリドール株式会社. POCL-9452/3: 2-4.

酒田 健一（編）

1980 『マーラー頌』 東京: 白水社.

佐野 旭司

2015 「《4つのオーケストラ歌曲》Op.22におけるシェーンベルクの作法の問題：マーラー
の交響曲第9番との関係において」『東京藝術大学音楽学部紀要』41: 45-60.

佐野 光司

2017 「マーラー：交響曲 第9番 ニ長調」『山田和樹 マーラー・ツィクルス 曲目紹介』
https://www.bunkamura.co.jp/orchard/lineup/15_mahler/introduction9.html 2021年10月
27日閲覧)

シェルリース, フォルカー Scherliess, Volker

1986 「マーラーの第9番響曲」『マーラー：交響曲第9番ニ長調（バーンスタイン／コン
セルトヘボウ管』磯山 雅（訳）CD解説書. 東京: ポリドール(グラモフォン).
F66G 20061: ページ記載なし.

シェーンベルク, A

1973 日本語訳『音楽の様式と思想』上田 昭 (訳) 京都: 三一書房.

柴田 龍一

2004 「曲目について」『マーラー: 交響曲第9番ニ長調 (小澤征爾/サイトウ・キネン・オーケストラ)』CD解説書. 東京: ソニーミュージック. SRCR 2725-6: 2-5.

白石 美雪

2012 「作品解説」『マーラー: 交響曲第9番 (金聖響/神奈川フィル)』CD解説書. 東京: オクタヴィアレコード. OVCX60: 3-5.

シルバーマン, アルフォンス Silbermann, Alphons

1986 Lúbbes Mahler Lexikon. Bergisch Gladbach: G. Lübbe.

1993 日本語訳『グスタフ・マーラー事典』山我 哲雄 (訳) 東京: 岩波書店.

Sponheuer, Bernd; Steinbeck, Wolfram (ed.)

2010 *Maher Handbuch*. Stuttgart: Metsker.

東条 碩夫

2001 「解説」『マーラー: 交響曲第9番 (井上道義/新日本フィル)』CD解説書. 東京: オクタヴィアレコード (EXTON). OVCL-00045: 2-4.

Walter, Bruno ワルター, ブルーノ

1936 *Gustav Mahler*. Wien; Leipzig; Zürich: Reichner.

1960 日本語訳『マーラー 人と芸術』村田 武雄 (訳) 東京: 音楽之友社 (1936年の初版および1937年のJames Galstonによる英訳に基づく).

1960 *Thema und Variationen. Erinnerungen und Gedanken*. Frankfurt am Main: S. Fischer.

2001 日本語訳『主題と変奏 ブルーノ・ワルター回想録』(新装復刊) 内垣 啓一; 渡辺 健 (訳) 東京: 白水社 (初版 1965).

渡辺 護

1990 「(タイトルなし)」『マーラー 交響曲第9番 (カラヤン/ベルリン・フィル)』CD解説書. 東京: ポリドール (グラモフォン). POCG-1182/3: 2-10.

ヴェスリング, ベルント・W Wessling, Berndt Wilhelm

1989 日本語訳『マーラー 新しい時代の予言者』喜多尾 道冬; 他 (訳) 東京: 国際文化出版社.

Zenck, Claudia Maurer

2010 “Neunte Symphonie”, in: Sponheuer; Steinbeck 2010: 362-379.

参照映像

Bernstein on Mahler 9 (1/6) <https://youtu.be/-SjAgSo7uro> 2021年10月29日閲覧.

Bernstein on Mahler 9 (5/6) <https://youtu.be/1SPQQvZFXDQ> 2021年10月29日閲覧.

Kent Nagano dirigiert Mahlers Neunte Symphonie. <https://youtu.be/s-RjDb6SjC4> 2021年10月29日
閲覧.

やまもと まりこ (音楽学)